

台湾の李登輝総統が、来る十月に広島で開かれるアジア大会へ貴賓として出席可能か否かが大きな話題になっている。本紙はこの問題を重視していち早く報道をリードしてきており、また、桑原寿二、椎名素夫、深田祐介、小堀桂一郎の諸氏がいずれも深い考察を経た見解を本紙に発表されている。私としては、いま、それら卓見に付け加えるべき点はない。日本政府の勇断を待つばかりである。

そうした折、私は去る八月末日に台北で李登輝総統にお会いし、長時間を自己毛で過ごさせて頂く機会を得たので、総統がいま考えておられること、総統と論じたことの一端を紹介したいと思う。

李登輝総統は今回も學者スティーマンらしい人柄をにじませながら、内外の諸問題を縦横に論じられた。その言葉の端々には、この

創造したいという李登輝総統の気持ちもおのずと伝わってきた。そのような李登輝総統から見たと、日本の最近の政治や外交の実態は論ずるに耐えないほどものか

といった昨今の俗論にたいし、いわゆる「中華思想」流のナショナリズムに基づくものではなく、新しい時代に相応しい普遍的な文化を

いま李登輝総統が考えていること

東京外国語大学教授 中嶋嶺雄

うだが、それは台湾人の率直な気持ちを代弁したまでであって、これから過去に対してではなく、未

ととって必要なのは、アジアのり大会に出席するしないは、本当に

きでであり、EU(欧州連合)を見た。これには一同も驚嘆している

た。これには一同も驚嘆している。総統はその場で書店に問い合せ、易経と現代社会との関連を記した本を取り寄せて全員に配って下さった。知り際に総統は、台北郊外に最近別荘を建て、大きな書庫をつくったとのこと。そこには四庫全書全巻や西田幾多郎全集と共に「中嶋先生の木」のぐら